

浮寝鳥／病棟の諸相

高野やすし

高野 やすし

高野 靖

昭和十六年十月十九日生

千葉県船橋市

昭和六十三年よりNHK俳句番組を視聴、俳句に興味を覚え、平成五年鹿児島赴任を機に「湾俳句会」入会、現在に至る。  
湾同人、俳人協会々員

浮寝鳥

塵を焼く煙まつすぐ春立てり

合格祈る絵馬に囲まれ梅真白

風薫る神奈川宿の松並木

身に覚えなき春泥を拭ひけり

石仏の千古の無言亀鳴けり

かつて飢ゑ凌ぎたる畑チューリップ  
気をもらふ新樹の幹に掌を当てて

土手歩くだけで十分若葉風

会議室どの窓からも緑さす

お茶の水学生多き薄暑かな

木劍降る右に左に夏燕

秋時雨八尾の町の石畳

佃煮の匂ふ路地裏ちちる虫

のぞき見る火口の底の草もみじ

張るよりも剥がす障子に手間取りぬ

松茸のつくづく見入る薄切りを

秋風の駅のホームの握り飯

澄む水に心の内を曝しけり

池の面の雲に漂ふ浮寝鳥

着ぶくれて己が影とは認め得ず

マフラーのどつと乗り込む浦和駅

裏道を横道へ抜け年詰まる

リニユールなりしベランダ年迎ふ

サッカーボール捧げて氷張りにけり

寒天の雲となり行く煙かな



病棟の諸相

ある夏の、その日は特に暑い日であった。

突然私は激しい頭痛、悪寒、発熱、発汗に襲われた。

二・三日様子をみたがり日に日に症状は悪化、近くの開業医を訪れた頃は横になることも座布団に座することもままならない状態であった。

開業医は数種類の痛み止めを処方してくれたが、それを服用しても一向に効果なく、三日後再びその開業医を訪れた。

ところがその医院前には「夏季休暇のため休業」の札が出ており、止むなくその足で総合病院を訪ね、何時間も待たされた揚げ句、あれほど痛み止めは効かないと言ったにもかかわらず、当番の若い医師にまたも似たような痛み止めの薬を処方された。

しかし痛み止めの薬の効果があるはずもなく、その数日後再度受診した結果、その病院の医師に入院を勧められ直ちに入院、原因究明にかなりの日数を要することとなった。これはその際病棟で体験した事実である。

## 同室の隣人

当初入院したのは五階内科の三人部屋で、私のベッドは奥の窓際であった。

窓際の隣のベッドは空いており、入口側の隣のベッドには私より十才ほど年下の患者が横になっていた。

この隣人は一日中殆んど口をきくこともなく、ベッドから出ることも滅多になく、看護師とのやり取りから察するとかかなり長期間入院中で、かつ快復の見込みはなさそうであった。

入院して丁度一週間目の朝六時頃、気分も大分良くなったので私は洗面所で歯を磨いたり、身体を拭いたりしていた。

そこに若い看護師が来て、傍らに黙ったままじっとしているので、私の洗面が終わるのを待っているのかと思い「お邪魔だったら移動しますよ。」と話しかけたところ、「いえ、そうではないんです。実は隣のベッドの患者さんのことでお話があるんです。」と  
言う。

その看護師の話によると、この隣人はマッサージを受けることが現在の唯一の楽しみとのことで、毎日看護師の仕事の都合がつく夜九時以降にマッサージしているとのことである。

確かにこの隣人は一日の内マッサージを受ける三十分間だけは別人のように饒舌であり、丁度消灯直後のためその声は大きく、弾むように部屋中に響いた。

その声が隣のベッドで苦しんでいる私に迷惑ではないか、というのが看護師の質問であった。

私は即座に答えた。

「いいえ、私は一切気にしておりません。聞きたくない時は廊下の隅にある面会用の椅子に座っておればいいし、何も心配することはありませんよ・・・」と。

実はこの回答は私の本心ではなかった。

本当は入院した当初からこの隣人の消灯後の長話に困っていた。

洩れ聞こえる話から、患者は五十台半ばの独身者で、関西の出身とのこと。仕事はトレーラーの運転手だが、仕事に復帰することは不可能らしい。

病状は深刻らしく、もしも私の回答次第でこの隣人の唯一の楽しみを取り上げることになったら、それは余りに酷だと直感したのだった。

顧みると、入院当初の私は昼夜を問わず呻き続けていたであろうし、この可哀相な隣人にさらなる苦痛を与えたことであろう。その点からもこの隣人の一日高々三十分ほどの眩きを非難する資格も無い。

「ありがとうございます。そう言っていただければ本当に嬉しいです。」と、質問した看護師は自分のことのように喜んでいた。

この時の看護師の嬉しそうな表情は今でも私の心に焼き付いている。

この看護師に限らずこの病棟の看護師には優しい人が多い。

元々看護師を目指すような人は資質的に優しい人なのか、はたまた病院の指導の賜なのか、多分両者相俟つてのことであろう……。

それは兎も角、その後マッサージの際の話し声は急に低くなった。

それが逆に私には気になって仕方がなかった。

## 五日振りの食事

入院して五日目の昼前、ナース・センターから「少しですがお食事が出ています。」と連絡があつた。

起きて見ると、机の一番上の棚に、粥一碗、鳥の煮物二切と野菜の煮物五切、何かわからないが小物の煮付二切、八朔四分の一、それに暖かい茶が出ている。

その時の嬉しかったこと。こんなにたくさん食べてもいいのか、と思わず目を瞠つた。十五日夕食からの絶食であるから十五食振りの食事である。

もちろんその日は夕食も出た。質量ともに昼食を上回る献立である。

普通に食事できることの歓びを、この時ほど強く感じたことはかつてない。

普通に生活できるということこそ、実は本当にありがたいことなのだ。初めて知つたのである。

退院後二カ月余を経た現在、この時の感激も薄れつつある。

この時の感激をいつまでも忘れることのないように、というのがこの稿を認めた動機である。

## 今日のことは今日に任せよ

間もなく午前六時、入院九日目の朝を迎えた。

暑さも一段落、いよいよ秋色深まる時節であるが、なにせ景色と言っても坪庭を挟んだ向う側の病棟の窓やその屋上の空調設備が見えるだけで、敢えて探せば屋上の上に白っぽい空が垣間見える程度で、まさに季節とは無関係の入院生活である。

そんな殺風景な病棟にも時として飛んできた小鳥が窓の外に止まったりする。

## 今日のこと今日のハンカチ洗ひつつ

今井千鶴子

そんな時、ふと右の句が眼に止まり、その世界に引き込まれた。

二、三年前の雑誌の付録にあった俳句手帳をメモ用紙として使っていたところ、たまに開けたページにその句が掲載されていたのである。

痛さで眠れない状況は昨夜から漸く脱したものの、今度は頻繁な放尿のため夜でも一、

二時間おきにトイレに立たねばならない。

トイレからベッドに戻りうとうとしていると、すぐにまた尿意に目覚める。

しかも、私が入っている七一二号室からトイレまでは廊下をまっすぐ片道約二十五メートル、深夜病人が往復する距離としては結構気力、体力を要する。

それを思うと、とにかく朝からでも眠れる時には眠って、あとは成り行きに任せるしかない。

そう思った時、自然に次の句が口を衝いて出てきた。

今日のこと今日に任せむ小鳥来る

高野やすし



## 小さな書棚

胆汁を管で直接胆嚢から身体の外部に排出するようになって二三日、多少は本を読める程度に回復した頃、退屈凌ぎに読む本はないかと、廊下の突き当りに設けられた面会用長椅子の傍の書棚を探すようになった。

書棚とは言っても、幅五十センチ、高さ一メートルほどのカラーボックスに本を置いただけの粗末なもので、中にあるほとんどは漫画か雑誌、文庫本の類である。

多分、この病棟の入院患者が退屈凌ぎに読んだ本を、退院の際等にそのまま置いていたものであろう。

漫画でも読めば読んだで面白い。翌月号は何処かと探すことも度々であった。

漫画以外では黄文雄著「韓国人の反日、台湾人の親日」は面白かった。

古いカップ・ブックス文庫で、文字は小さく、活字は薄く、かなり読み辛かったが、内容の面白さに惹かれ数日かけて終に読み終えてしまった。

そういうこともあって、後日外科病棟に移った時、たまたま我家に二冊あった与謝野

晶子の文庫本の一冊「みだれ髪」をその書棚に置いたことがある。

ところが翌日行ってみると、この本は書棚から消えていた。

十日ほど経過後、退院する際にその書棚を探したがやはり見当たらなかった。

もしこの本が熱心に読んでくれる人に巡り合えたのであれば、そしてその人が読了後この書棚に返してくれたなら、この本の運命もまんざらではないと思うのだが・・・。

## ラジオの深夜番組

病棟の消灯時間は午後九時である。

消灯後、翌日目が昇るまでの十時間余は私には恐怖の時間帯であった。

そんな時、イヤホーンで聴くラジオというものが如何に心を癒すものかを知り、眠れない夜は必ずラジオのイヤホーンを耳にしていた。

ラジオを聴きながらうつらうつらしていた時、ラジオがベッドから床に落ちた音で目覚めたことも何度かあった。

そんな時、落下の衝撃でラジオが壊れたのではないかと、自分の胸がつぶれたような思いであった。

また、ラジオの乾電池が切れた時、病院の売店に乾電池を買いに行ったところ、これまた運が悪いことに決算棚卸のためまたまその日だけは販売できないと断られ、ラジオの無い入院生活の夜の長さ、辛さを痛感したこともあった。

ラジオの深夜番組での五木寛行の話や若かりし頃「歌声喫茶」で歌った懐かしい歌な

ど、辛い入院生活の中にあつて食べるようにイヤホーンに聴き入ったものである。

早朝の番組では各方面で活躍している人の経験談も多く、ラジオのお陰でずいぶんいろいろなことを学んだ気がする。

ラジオの良さは目を使わない点にある。このためドライブレ中や田畑等での仕事中、更には家事の最中等々ずいぶん幅広く活用されてはいるが、テレビに比べ番組内容は偏っているとともに劣つてもいる。

現代社会はパソコン、テレビ、ゲーム等で眼を酷使している。視力が衰えた高齢者も増加しつつある現在、目を休めるラジオの価値は大きく、国民の健康を守る観点からも、放送各社はもっともっとラジオ番組の充実に努力するべきである。

## 夜の侵入者

一人部屋に移って間もない頃、午前三時頃目覚めた。

けたたましい消防車のサイレンが聞こえ、窓を覗くと病院前の国道を東京方向へ走る消防車の列が見えた。

はつきりとは確認できないが、火事場はこの近辺ではなさそうだった。

まずは安心してトイレに行き、暗い部屋のベッドでラジオのイヤホーンを耳にラジオの深夜番組に耳を傾けていた。

すると突然部屋のドアが開き、誰か入ってきた。

その侵入者は洗面台で手を洗うと、何も言わずそのまま出て行った。

私は看護師の夜の見回りだろうと思い、そのままラジオを聴いていた。

朝五時半、看護師が採血に来たのでそのことを話したところ「看護師は患者さんの部屋で手を洗ったりはしません。」ときっぱり否定された。

多分、他の部屋の患者が部屋を間違え、おかしいのに気付いたものの、深夜のことで

もありそのまま出て行ったのであろう。

後日、やはり眠れないままベッドの中で悶々としてみると、午前二時頃部屋のドアが開いて、部屋の中央にある八本入りの大蛍光灯が点った。

その眩しさに思わず「ウワー」と声を上げたところ、蛍光灯が消え「マチガイマシタ、スミマセン。」と年配の女性の声があり、ドアが閉まった。

その夜、しばらくするとまたドアが開いた。

看護師であろう、懐中電灯で部屋の様子を見、そのまま去って行った。

入院病棟の夜は決して静かなばかりではない。

本来は患者のために作られたと思われる、医師等が自由に病室に出入りできるという便法が、時代の変化とともに、例え殺人があってもおかしくない場所になったのである。

そろそろ厚労省も病院も手を打つべきと思う。

## 大軒の合唱

胆嚢摘出手術から四日後、重看護病室から普通病室に移された。

この普通病室は六人部屋で三人づつが二列に並んでおり、私はその一列目の真中のベッドであった。

とにかく重看護の状態を脱したということで、その時は一安心した。

ところがその夜、大変なことがわかった。

この部屋の住人は私ともう一人の患者を除き揃って大軒をかくのである。

しかも私の左隣から始まった嵐のような大軒は、私の前、右斜め前、右隣と次次に移動して行くのである。

かろうじて左斜め前の患者だけがその軌道から外れている。

時には軒の大合唱をしながら、大体は独唱でたつぷり一晚中軒が続くのである。

しかも音程やリズムが不規則であるから、それらが変化する度に聴いている方の心臓がどきどきする。

哀れなのは左斜め前の若い男と私である。

眠れぬままに頻繁に寝返りを打ったり、トイレに立ったりする。

身体の痛いのは何とか我慢出来るが、不快な音ばかりは我慢のしようがない。

お陰で眠れないまま気の遠くなるような長い一晚を送るはめになった。

もつとも酈というのは当の本人には分らないもので、私にしても気がつかないだけで、うとうとしながら結構酈をかいていたかも知れない。

左斜め前の酈をかかなかった若い男はその翌日退院した。

その朝、その男のベッドに二人の子を連れた若い奥さんが来て、いそいそと荷物を整理していた。

一歳と三歳位の子どもたちはベッドに這い上がり「パパ、パパ・・・」と盛んに父親にじゃれついていた。若い男も幸せそうであった。

何の病気か知る術もないが、この若さで入院するとは奥さんもさぞ心配だっただろうと、私もこの男の退院を共に慶んだ。

それは兎も角、この部屋の唯一の同志を失った私は、こんな夜が三日も続くと気が狂



ってしまいかも、と恐怖に慄いていた。

ところが運が良いことに、入院時妻が申込んでいた個室にたまたま空室が出たことが分り、その日の午後早々にそちらへ移ることができた。

個室に移ってからは躰に悩まされることもなく、消灯後にも読書ができるという正に天国のような夜が続くことになった。

## 看護実習生

外科病棟に移って間もなく大学の看護学部の実習生が私の許に配属された。

何でもあちこちの看護学校から病院に実習依頼が来るらしく、看護師の補佐として使って貰えればとのことらしいが、本音は卒業後の就職先確保にあるようだ。

私の担当になった看護師は大学三回生の女性で、実習に協力して欲しいとの病院からの要請だったため、断る訳にもいかずそのまま受け入れたが、正直なところ、朝、昼、午後と病状など細かく聞かれるのには当初うんざりした。

しかし、こちらの体が回復するにしたがい冗談など言える仲にもなり、退屈凌ぎの良話し相手になった。

退院の前日、この看護師がお別れの挨拶に来た。

その際和紙の切絵で作った小冊子を持参、その内容を説明するとともに、説明後その冊子を私にプレゼントしてくれた。

その冊子は殆んど手作りのもので、その中身は今回の手術の概要と退院後の食物の注

意点を纏めたものであった。

文字はさほど上手ではないものの、マジックで丁寧に書かれている。

膨大な時間をかけ、一生懸命作ったものであることは一目瞭然である。

私はこの小冊子に深い感動を覚えた。

何かお礼をしたいと申し出たが、きっぱり断られた。

止む無く、持っていた一筆箋に簡単なお礼を書き、彼女に渡した。

七日間本当にありがとう

おかげで入院が楽しかったよ

これから良く勉強して

みんなから感謝される

看護師さんになってください

彼女はその一筆箋を受け取ると嗚咽を洩らした。見ると目を真っ赤にして、突然子供

の  
よ  
う  
に  
わ  
ん  
わ  
ん  
声  
を  
あ  
げ  
て  
泣  
き  
始  
め  
た  
。

## 藤田先生

藤田先生は診察後ただちに入院を指示してくれた内科医である。

それ以前、同じ症状で近所の開業医や藤田先生と同じ病院の若い内科医の診察をうけたが、いずれも解熱剤や痛み止めの薬を処方してくれたものの、入院を勧められるまでには至らなかった。

藤田先生は四十歳前後の女性医師である。

入院当初、昼夜を分かたず病棟を歩き来する藤田先生の姿を拝見し、てっきり看護師と思い感心していたところ、何と女医さんであった。

ところで、私が受診し入院したのが金曜日の夕方だったため、月曜日の午後まで担当医が決まらず、そのため病状を医師に聞くこともできず、入院直後の三日間大変不安な思いで担当医の決まるのを待ったのを記憶している。

結局、藤田先生が担当医に決まったが、これは私にとって大変幸運であった。

当初、私の担当医が女医ということで心配になった私は、それとなく看護師に先生の

ことを聞いたところ、「女性ではありませんが、臨床経験が豊富で、私どもの間では絶大な信頼があります。」との回答であった。

病室や廊下で見かける先生は看護師と同じように忙しそうであったが、診察室で病状を説明する時の先生は、その態度や言葉は女性らしく優しいものの、さすがに医師としての威厳と自信に満ち満ちていた。

その説明は疑問をさしはさむ余地もないほど明快であった。

私はこの先生にすべてお任せすることに何の躊躇もなかった。

横腹に穴を開け、胆嚢に溜まった胆汁を体外に排出する管を通してくれたのもこの先生である。

その時、それを見ていた手術室のスタッフが口々に先生の技量を称賛しているのが聞こえた。

その後外科病棟に移るまで、藤田先生の指示は極めて適切であった。

ただ、この有能な女医は今時の医師には珍しく肥満体であった。

とにかく、現代の医師は傍から見ただけでも忙し過ぎる。

藤田先生に限らず、入院担当の医師は朝早くから夜遅くまで病棟を走り回っている感じで、丈夫な医師でも健康を維持するのは大変であろう。

医師不足が社会問題となっている昨今、一患者の身で本当に失礼とは思いますが、先生のご健康を祈らずにはおれない。

## 命の管

現代医学は素晴らしいの一言に尽きる。

胆嚢摘出手術の直後、身体中にいろいろな用途の管が絡み付いていた。

一体、私の身体に幾つの管が繋がれているのだろう。

まず左腕に点滴用の管と右横腹に胆汁を排出する管、この二つの管は入院時から退院日近くまで私の身体の一部として長い間働いてくれた。

次に胸の右斜横には手術後に臓器に溜まった血液等を除去する管、背中に痛み止めの薬剤を入れる管、鼻には酸素吸入用の管、更には小用を袋へ流す管、この四つの管は胆嚢摘出後追加されたもので比較的短期のものであった。

多い時にはこれら六個もの管が我が身体と外界とを結んでいたのである。

注意して身体を動かさないとこれらの管が外れそうになったり、管と管とが絡み合ったりして元に戻すのが厄介であった。

そんな身体でも病室から見える海神山の松と仲秋の月は夢のように美しく、絡み合う



管を引き摺りながら、窓からひたすら夜空を仰いだ。

## 月仰ぐ命の管を全身に

高野やすし

手術後、これらの管が一つづつ身体から外される時の快感は例えようもない。

その都度全身が生き返ったような錯覚に陥ったものである。

今はその傷痕ばかりが痛々しいが、それを見るたびに無事快復した喜びに浸るとともに、現代医学と担当の医師や看護師に感謝の気持で一杯になる。

浮寝鳥／病棟の諸相

2014年10月5日 第1刷発行

著者 高野やすし

発行人 谷内ひろ志

出版 らんこし作家デビュー・プロジェクト

© Yasushi Takano 2014

